【開催報告】　地域の居場所づくり交流会Ⅶ ＠茅ヶ崎

日　　時： 2023 年 3 月 4 日(土) 14：00～17：00　　参 加 者： 31 名
会　　場： ちがさき市民活動サポートセンター　フリースペース大
講　　師： 礒井(いそい) 純充(よしみつ)さん(まちライブラリー提唱者)
事例紹介： 池田(いけだ) 美沙子(みさこ)さん(C の辺り)
大西(おおにし) 裕太(ゆうた)さん(話せるシェア本屋とまり木)
芝(しば) 匠子(しょうこ)さん(ぬくぬく文庫)

本年度の地域の居場所づくり交流会は、「本」をテーマに久しぶりの対面開催。今回も定員を超える申込みがあり、講師・事例報告者・スタッフも含め、40 人近い人数で、熱気あふれる交流会となりました。
会の終了後も、しばらく参加者と登壇者、参加者同士の自己紹介、情報交換が続きました。

講 演 ：「本を介した居場所づくり～人と人をつなぐメディアとしての本の可能性～」

「まちライブラリー」提唱者の礒井です。全国各地の「まちライブラリー」を運営しているわけではなく、全国あちこちに行っては、「まちライブラリー」をやらないかと、火付け役をやっています。本日のテーマは、「本を介した居場所づくり～人と人をつなぐメディアとしての本の可能性～」となっていますが、私が実践している「まちライブラリー」のことを中心にお話します。

私は大坂の生まれで、大学から東京に来て、卒業後に森ビルという会社に就職しました。あと 2 カ月あまりで、42 年間の会社員生活に終止符を打つことになります。私が長くやっていたのは社会人教育で、「アーク都市塾」という仕事を担当していました。その後色々な仕事をした後、「まちライブラリー」の仕事を始めたのは、2010 年ぐらいからです。これは、自分のライフワークとして自発的に始めたものです。

1987 年アークヒルズの地下室に、小さな私塾が誕生しました。このアーク都市塾は、森ビルのオーナーが 80 歳の時に始めた塾です。森ビルの創業者は、横浜市立大学の教授を長くされていた人で、54 歳で大学をやめて森ビルという会社をつくった人です。1980 年代の後半は、アカデミズムの世界では、ニュー・アカデミズムが流行し始めた時期で、効率だけでモノをつくってもよくならない。むしろ、ファッションとかデザインといった要素を取り込んでいくことが必要ではないかと言われていた時代に、このアーク都市塾をスタートさせたのです。

1993 年、森さんが 87 歳で亡くなってから、都市塾をだんだん変貌させていきました。アカデミーヒルズという、色々な大学のサテライトキャンパスを 96 年につくったのですが、当時は、サテライトキャンパスという概念はなく、大学の拡大は制限を受けていました。「都心にキャンパスをつくった」という報道が出た後は、都からお叱りを受けましたが、慶応義塾大学の藤沢に湘南藤沢キャンパスの臨時教室ということで、結局は、六本木にキャンパスをつくることができました。

その後、20 年前に六本木ヒルズという建物が出来て、その中に六本木アカデミーヒルズをつくりました。そこに会員制図書館をつくったのが、私です。今のコワーキングスペースの走りになったと思います。

当時 6000 円で Wi-Fi が使えて、午前 8 時から夜の 11 時まで使える場所は他になかったと思います。

こういう仕事をする中で、凄く成長しているように見えるのですが、自分の中では、失ったものが大きいと感じていました。顔の見える関係性を大切にできなかったのです。六本木ヒルズには、毎日何百人も来るのですが、なかなか顔と名前が一致しないのです。その頃の自分は、何人講座に参加したのか。対前年比でどれだけ収益があがったか。数字ばかりに関心が向き、どんな人が来ているのかに無関心だったのです。これはちょっとまずいなと思いつつ、世の中の雰囲気に流されていたのでした。

こうした状況をなんとか改善したいと思っていたところ、他の部署に異動を命ぜられたのです。ライフワークは組織に頼ってやってはダメだと思いつつ、モヤモヤした状態がしばらく続いていました。それから数年が経ち、また組織との軋轢があったころに出会ったのが、友廣裕一さん(当時 26 歳)でした。当時、私は 52 歳でした。

彼は全国の限界集落津々浦々を歩いて、地元の人に泊めてもらい、ヒッチハイクで次の目的に移動する旅を続けている人でした。彼と会話をする中で、「最初、彼は自分探しの旅に出た。どこに行っても彼を歓待してくれる人に対して『自分は何もできないが、とにかく、目の前の人を喜ばせよう』と思って旅を続けてきたら 6 カ月が経っていた」ということがわかりました。そして、私と真逆の生き方をしている人間だなーと思ったのです。

それまでの私は目の前の人を見るのではなく、名刺の肩書とか地位しか見ていなかった自分に気づいたのです。この人と付き合っておくとどんな得があるかというように、相手の立ち位置ではなく、自分の立ち位置からしか相手を見ていなかったのです。そして、「こんな人生を続けていいのか」と自問したわけです。その後、彼の元に弟子入りしたのでした。とにかく、「人生を切り返さなければいかん」という気持ちになりました。それが、「まちライブラリー」の出だしの出だしです。

そして、彼に紹介されたのが、友成さんという早稲田大学の先生でした。友成さんは、「問題はタコ壷でなく、タコだった」というのです。我々は、お金をもっているとか社会的な地位が高いとか、そんなことばかり気にするが、素タコ同士でつながらないと問題解決にはつながらない、ということです。
友成さんは、マクロ政策ではなく、ミクロなレベルで「みんなの夢を応援し合う」という趣旨のゼミを早稲田大学でやっている方で、友廣さんは友成ゼミのゼミ生でした。そして、私もゼミに潜りこんで、一緒に学ぶことになったのです。

こうして、「まちライブラリー」の最初の骨格が生まれていきました。目的は、顔の見える関係性を取り戻そうということなのですが、そうは言っても会社の仕事ではないので、個人の力でどこまでできるのかというのが、今でも私の最大のテーマです。

私は、「一人の力で、結構色々なことができるはずだ」と思っているのですが、ほとんどの人はそうは思っていないのです。コネとか組織とか、制度がないと何もできないと思っている人が多いが、「そんなことはない」というのが、「まちライブラリー」の挑戦で、これを 12 年間やり続けてきたわけです。

本を買って図書館をつくるのは難しいので、寄贈本を集めるところから始めました。寄贈本にメッセージカードをつけてみることにしました。カードは、オーナーを含めて 7 人の人がメッセージを書ける構造になっています。これは、大阪の「まちライブラリー」で見つけた「さよならタマちゃん」という本で、がん闘病記のマンガです。メッセージカードを読むと、「がんの勉強ができた」「涙なしには読めませんでした」などのコメントがあり、一つの本で読者がつながっていく様子がわかります。

さて、六本木ヒルズの会員制図書館の会員は 3000 人近くになったのですが、あそこに行ける人は東京圏の中でも限られた人で、そんなに沢山の人はいけません。なので、小さな図書館が沢山あった方がいいんじゃないか。バスを待っている間とか、病院の待合室とか、買い物のついでとか。こういうところにライブラリーがあるといい。そして、そういうところで学び合いの会ができるといいなーと思いました。

というのが、私の初期の妄想でした。特に、小さな学び合いが大事だと思うのです。今日の交流会のテーブルの人数は 5 ～ 6 人ですが、これくらいが、人の顔を覚えられるちょうどよい人数なんだと思います。偉い人の話を聴くよりも、テーブルの中の人と話をして仲良くなるのが大事なのです。身近な人から話を聴いた方が、行動に移しやすいからです。偉い人の話を聴くことは、テレビを見ているようなもので、話が終わったらすぐに忘れてしまいます。

最初の一歩は難しかったです。東京や大阪などあちこちで試みたのですが、なかなか根付かない。自分の生まれ故郷の大阪市中央区に父親が残してくれたビルの空き室に、ライブラリーをつくることにしました。仲間と一緒にライブラリーをつくったのですが、1 ヵ月経ち、2 ヵ月経ち、3 ヵ月経っても誰も来ない状態でした。

長年の東京暮らしで、大阪人の気持ちがわからなくなっていたのです。友人に「大阪人の気持ちってなんやねん」と聞いたら、「飯をくわせなあかん」という答えが返ってきました。そうしたら、メンバーの中から料理をつくってくれる人が現れたのです。「本とバルの日」とネーミングをしたイベントを企画しました。おいしい料理を提供するので、かわりに本を持参し、交流会が終わったら寄贈して欲しいとお願いしました。徐々に人が集まるようになり、今では 1 万冊以上の本が集まっています。

朝から昼過ぎまでは、ベビーカーに子どもを乗せたおかあさん、昼からは小学生が来て、遊んだり、勉強したり。夕方になると、仕事帰りの社会人が来るようになり、だんだん顔なじみになりました。この部屋の半分くらいしかない小さなスペースです。その後「まちライブラリー」は全国に広がっていきます。カフェにできたり、お寺にできたり、公園の中にピクニックシートを敷いてライブラリー活動をしてくれたり、歯医者さんの受付に置いたり、大学の透析センターにできたりと、色々な場所にできていきました。

これは、小平市のカフェです。ここのオーナーが生まれつき聴覚障害のある方で、東京に出てきてから、人とつながる仕事がしたいと思い、カフェやレストランで働いたのですが、どこに行っても裏方の仕事に回されてしまったそうです。どうしてもお客さんとコミュニケーションがとりたいと思ったので、最終的に、彼女は自分のお店を開き、フロアに立つことにしたそうです。お店にメッセージボードがあり、このボードに「ヒロタです。ご注文は」と書いてあるので、こちらも、「イソイです。よろしく」と書き、ここからコミュニケーションが生まれてくるわけです。

普通、我々の社会では、レストランやカフェに行った時に、フロアの店員さんとこうしたやり取りをすることはありません。しかし、名前を呼び合うということは、とても大事なことだと思うのです。こういう関係をつくることの大切さを、私は彼女から学びました。

この方は、奥さんを 9 年前に亡くした方で、奥さんが結婚してからためた本が 2000 冊ある。この本を捨てたくないので、どうしたらよいかとの相談を受け、「まちライブラリー」を開くことにしたのです。5 カ月間整理して開館式をやった時の話です。近くのケーブルテレビ局が取材に来て、オーナーさんにインタビューをしました。オーナーさんは、「妻が亡くなり、自分も早く妻のもとに行きたいと思っていたが、今では、この文庫を 1 日でも長く残したい」とインタビューに答えていました。

小学生が集まって(学校の)廊下に本を置いて、「まちライブラリー」にしている例もあります。学年を超えて本の借り貸しが生まれています。これは、アメリカで生まれたリトル・フリー・ライブラリーで、家の前やビルの前に本箱を置いています。これの効用は、箱は開けることを楽しむ子どもたちがライブラリーにやってくるようになることです。大人は、他人の家の前にある本箱を開けるのは抵抗がありますが、子どもは気にせず、本箱をガチャガチャ開け閉めします。この手法を使うことで、子どもたちが大人のいる場所にやってくるようになったのです。

公共図書館も手伝ってくれて、伊丹市の公共図書館では、館の中に市民広場のような場所をつくり、そこに市民が本を持ち寄って「まちライブラリー」を運営しています。

岐阜県では、「岐阜メディアコスモスにばかり多くの人が集まり、近隣の商店街に人がこない」との声に応えて、街の中に「まちライブラリー」を設置しています。

「まちライブラリー」では、本を持ち寄って交流会を行う「植本祭」というイベントを行います。私が客員研究員をしている大阪府立大学(現・大阪公立大学)では、サテライトキャンパスの壁一面に本棚をつくり、市民が自分の本を持ち寄ってライブラリーをつくるという試みを行いました。「蔵書ゼロ冊からの図書館の誕生」ということで、当時新聞にも取り上げられ、話題になりました。

植本祭というのは、植樹祭をもじってつくった私の造語です。やり方は、「島を語ろう」とか、「子どものための本棚をつくろう」とか、「働き方を考える」などのテーマを決めて、数名くらいずつのグループに分かれて、そのテーマについて語り合い、テーマごとに関連分野の本棚をつくります。そのグループが何度も何度も大学のサテライトキャンパスに通ってくれるといいなと思ったのです。というのは、キャンパスの立地があまりよくなかったからです。

サポーターというのは、こうした場を一緒に育てる人です。みんなで集まってイベントを企画したり、本の寄贈をしたり、本棚整理したりします。出入り自由なので、今月は来るけど来月は休み、というのも OK という形でやっています。

ここで気が付いたのは、沢山の人を一度に集めるよりも、小さなグループを沢山集めた方が、仲間が見つかるということです。さっきの植本祭には延 500 人来たのですが、50 のグループに 10 人ずつ集まった方が、仲良くなれるわけです。

コンサートや講演会やって、100 人、200 人集めても、仲良くなることはほとんどありません。隣の人と話始めるのは余程勇気のいることです。ですが、数人のグループに分かれると、気軽に会話ができるのです。私の言葉で言うと、ソーシャル・マーケティング型のイベントと呼んでいます。

企業との連携もあります。これは、東急不動産という会社が、大阪のキューズモールという商業施設につくった、「まちライブラリー」の事例です。「ららぽーと」とか「AEON」のような大きな商業施設ではなく、50 店舗ほどのコミュニティ型の商業施設です。

店舗の上階には、ランニングコートやフットサルコートがあるのですが、スポーツをしない人にもこの施設に来て欲しいということから、「まちライブラリー」を開設することになりました。面積は８０坪くらいです。公共図書館の 4 分の 1 程度といったところです。壁中が本棚になっています。

これは、東大阪市文化創造館の音楽ホールに併設した「まちライブラリー」です。これは、町田市と東急(電鉄)が開発した南町田グランベリーパークの敷地内に開設した「まちライブラリー」です。

次は、宮崎県小林市の TENUMU ビル内に開設した「まちライブラリー」です。

次は、北海道千歳市に誕生した日本最大の「まちライブラリー」です。古い商業ビルの中にあり、中心市街地活性化の拠点となっています。2016 年 12 月に、オープンしました。2016 年 12 月から 2021 年 3 月までに 24 万人を超える来場者があり、会員数は 2586 人となりました。しかし、都合により、閉鎖することになりました。

ライブラリーの存続を希望する有志が署名活動を開始し、2021 年 1 月には 2200 人文の署名が集まり、千歳市に提出しました。その後、「まちライブラリー」の再開のための予算審議をする市議会に 38 人の高校生が傍聴にくるという出来事があり、新聞でも報道されました。

結果として、「まちライブラリー」は、JRINN というホテルの 1 階部分に場所を移して再開することになりました。こうして、千歳市では、「まちライブラリー」の運営予算を税金で支出する流れができたのです。昨年の秋には、やまびこ号という図書館バスを使って出張図書館の活動も生まれています。これは、リトル・フリー・ライブラリーのように、家の前に置く本箱のコンテストを開催した時の様子です。

ここからは、長野県茅野市の事例です。駅前が寂れてきたので、コワーキングスペースに併設したまちライブラリーをつくることになりました。一箱本棚オーナー制度を採用し、個人の蔵書を売ったり、貸しだすこともできます。2021 年秋には駅前の活性化を狙って、古本市やトークイベント、植本祭をしました。2015 年から、ブックフェスタというイベントを開催しています。これは、まちライブラリー、公共図書館、書店などをつなぎ、本を通じて、人に出会うことを目的としています。

茅野市で実施したブックフェスタでは。蓼科高原で、焚火を囲いながら、作家の原田マハさん達と「本・文化・まち」を語るというイベントを開催しました。さらに、蓼科山荘で岐阜市立図書館長と語る会も開催しました。これは、茅野駅の自由通路の様子の変化です。以前はガランとして何もない通路でしたが、通路に本箱を設置したことで、人がベンチに腰掛けながら本を読む流れができ、活気が蘇ってきたのがわかります。さらに、商業施設の空スペースに本棚のあるギャラリーもオープンしました。2022 年からは、コワーキングスペースの指定管理を受けたことを機に、利益還元自主事業として、「まちライブラリー」エリアを市民参加による本棚づくりをして拡大しています。

数年前より、「蓼科を本のまちにする多地点の拠点づくり」が進行中です。ワークラボ八ヶ岳に加え、東急リゾート内山荘、鹿山別荘地鹿山図書館、アルピコ別荘地、蓼科温泉親湯があります。蓼科温泉親湯には、ライブラリーラウンジ＆バーがあります。旅館に併設されたライブラリーとしては日本最大ではないかと思います。また、「まちライブラリー＠蓼科山荘」には、ドイツ文学の先生の蔵書があり、泊まれる図書館となっています。

最後に紹介する事例は、「まちライブラリー＠MUFG PARK」です。2023 年 6 月に開館予定です。約 40m の及ぶ扇型の本棚があります。ユニークなのは、生活（いとなみ）の記憶を集めたタイムカプセル本棚というアイデアを取り入れた点です。タイムカプセルの中には、子どもの成長記録、旅の思い出のパンフレットや写真、日記などが入る予定です。

このように、「まちライブラリー」は、2010 年頃に活動を開始。実験設置期、活動確立期、活動展開期を経て 2022 年からは、民設公共性模索期に入っています。北は北海道から南は沖縄まで、さらに海外も含めて約 990 カ所の「まちライブラリー」が活動をしています。「まちライブラリー」は、「誰でもできる」、「やりたいと思ったらできる」活動と言えます。

これは、「まちライブラリー」の各地への展開構想図です。私的な空間での活動が 90%、公共的活動空間が 10%。個人が 62%、小規模団体が 17%。企業等 15%、図書館、行政が 6 %という内訳になっています。2013 年には。公共のためのサービス・システムの部門で、グッドデザイン賞を受賞しています。
また、同年、Library of the Year 2013 の優秀賞に選ばれました。

「まちライブラリー」の目指すものは、企業・大学・病院・図書館と関係を持ちつつ、「まちライブラリー」の輪を介して、利用者同士が横につながることです。

さて、これは、「まちライブラリー」の運営者へのアンケートの集計結果です。「人の交流が増加した」との回答が 71.5%、「人間関係が良好になった」との回答が 64.7%。「近隣関係が増加・良好となった」が 40%。「まちへの愛着が増した」が 45.7%。「本業へのプラスの影響があった」が 52.4%となっています。このアンケート結果は、「まちライブラリー」の活動によって、人と人の交流が活発となり、人間関係が良好になることを表しています。

次に、活動をはじた理由を尋ねています。「本が好きだから」を 1 番に選んだのが 20%に対して、「地域や施設を活性化させたかったから」を 1 番に選んだ回答者は 41.5%となっています。

では、どんな人がうまくいっていて、どんな人がつまずくのかを見ると、こんな感じです。
・場づくりを目指している人
・行政、企業は、失敗しやすい
・成果を求める人＝ビジネス系の人
・制度や仕組に固執する人
・他の人の依頼ではじめた人
・他者のため、人のためにやる人

一方、うまくいきやすい人はこんな人です。
・場づくりを目指していない人
・趣味の本を集める、遺された本を活かす
・自らの課題に挑戦している
・人からの頼みでなくて自らのやりたい！
・無意識の場づくりになっている
・やって楽しい、楽だと思っている人

「まちライブラリー」が目指すものは、活動の規模を拡大することではなく、納豆や味噌、酒に含まれる酵母のように、発酵しながらじわじわと成長していくイメージです。「まちライブラリー」とは？　個人でも、地域社会の主役になれるという挑戦なのです。まちの小さな図書館をみんなの広場にしていくことが大切だと考えています。

【事例報告 1】♠池田　美砂子さん(C の辺り)

「C の辺り」は、コワーキングスペース兼一箱本棚オーナー制の図書館です。
サザンビーチちがさきの「茅ヶ崎サザン C」というモニュメントのすぐ目の前にあることから、「C の辺り」という名前をつけました。

思い返せば、すべての始まりは、娘が幼稚園の時に借りてきた絵本「ティモシーと

サラ　ちいさなとしょかん」でした。本好きのお爺さんが自宅に図書館をつくったことがきっかけとなり、街中に小さな図書館ができるというストーリーで、娘と「茅ヶ崎がこんな街になったらいいね」と話していました。それからしばらくして、娘が自宅で図書館を開きたいと言い出したため、館長に任命。小学校に入学した 2020 年 4 月、家の土間に本棚を並べて「うみべのとしょかん」をオープンしました。最初は、大人の本 100 冊、子どもの 100 冊からスタート。ちょうど新型コロナウイルスにより学校が休校となっていた頃でした。

手書きの看板を出して活動をはじめたところ、近所の子どもたちが本を借りに来るようになりました。ときには自宅の駐車場にも本を出すようになり、「夏まつり」や「ハロウィンパーティ」など手作りのイベントも開きました。「うみべのとしょかん」の活動から、「本があれば、気軽に人が来てくれる」ということを実感するとともに、「本は、人と人をつなぐ」ということに気づきました。

そんなある日、海辺の近くに空き物件を見つけ、ここを借りたら面白いことが起こりそうだという予感がしました。また同時期に、静岡県焼津市で「みんなの図書館さんかく」という一箱本棚オーナー制図書館を開いた土肥潤也さんの記事を読み、家族揃って現地に視察に行きました。その記事には、「完全民営・黒字経営の図書館」と書かれていました。物件を借りて私設図書館を開いても経営が成り立たないと思っていたため、一箱本棚オーナー制の仕組みには驚きと興奮を覚えました。

視察での会話からヒントを得て、自宅で運営していた「うみべのとしょかん」を、経済が回っていくパブリックな図書館にバージョンアップできないかと思うようになりました。また、夫婦で在宅ワークをしていたため、海を眺めながら仕事がしたいという純粋な動機も重なり、ダメもとで物件を申し込んでみたところ、幸いにも借りることができました。そこから知り合いに声かけ、床張りや本棚づくりなどの作業をワークショップとして楽しんでもらいながら、施設の DIY を進めていきました。約 4 か月、100 人以上の手による DIY 期間を経て、2021 年 9 月 1 日に「C の辺り」をオープンしました。

「C の辺り」の機能は、会員制のコワーキングスペースと一箱本棚オーナー制図書館です。誰でも自由に出入りすることができる図書館は、それぞれの本棚がオーナーの自己表現の場となっており、本を介して、貸し手と借り手がつながっていっていきます。ライブラリーのオーナーは 1 ヶ月 2000 円で本棚を借りています。本を借りる人は、初回登録料 500 円を払えば、いつでも本を無料で借りることができます。

約 50 人いる本棚オーナーには、ビーチクリーンをしていてゴミ問題に関心のある人、本にまつわる活動をしている人、公共政策学の博士、まちづくりに関心のある人、現役の看護師さん、ミュージック・カフェを開いている人など、実に多様な方々がいて、まるで街の人のショーケース。約 8 割は茅ヶ崎在住ですが、遠くは群馬県や愛知県の方もいて、さまざまなつながりが育まれています。

私たちは、「豊かな人間関係こそ、人の幸せにつながる」という仮説をもっています。
「C の辺り」は、「本」と「仕事」という物語を通して、さまざまな関係性を育み、幸せのあり方を探求していく場にしたいなと思っています。関係資本が増大することの方が、金融資本が増大することよりも大事だと考え、ライブラリーオーナーやコワーキングメンバーになってくださる方には、「つくる、つながる、もちよる、たすけられる、おもしろがる」という 5 つの「大切にしたいこと」を必ず伝えています。
「C の辺りには、図書館やコワーキングを利用するだけではなく、たくさんの関わりしろがありますよ」というメッセージです。

オーナーやメンバーになってくれた方の「関わりしろ」の一つに、お店番をする権利があります。
お給料を支払ってお願いする「スタッフ」ではなく、この場所をともに運営していく「お店番」。

「お店番をしながら得意を活かして小さなイベントにもチャレンジしてみてください」と伝えたところ、料理教室や手話講座、糸かけ曼荼羅ワークショップ、チェアヨガなど、多様なイベントが開催されています。また、飲食店営業許可を取得したキッチンでは、日替わりでランチやコーヒーを出してくださる方もいます。関わる人々によって、「C の辺り」はどんどん彩り豊かになっています。

人がオーナーシップを持つきっかけは、「面白そうだ、やってみたい」という気持ちです。そうした気持ちが参加のハードルを下げ、消費者(お客様)から当事者(オーナー)へ変わっていくのだと思います。

場を運営しながら、「誰もが、自分が活かされる場を探している」ということに気づきました。そしてその「活かされた」という感覚は、コミュニティへの貢献によって得られるのではないかと感じられるようになりました。「居場所」と呼ばれるような場所には、お客様として通うのもいいけれど、オーナーシップをもって関わると、さらに居心地のよい場所になるのではないかと思います。

そういう意味で、一箱オーナー制図書館は、参加のハードルの低い素晴らしい制度だと思います。そして何よりも本は、ヒトとヒト、ヒトとコトをつなぐ優秀なつなぎ役なのではないでしょうか。ぜひ「C の辺り」に足を運んでみてください。

【事例報告 2】♠大西　裕太さん(話せるシェア本屋とまり木)

昨年 4 月に「話せるシェア本屋とまり木」をオープンしました。最初に自己紹介します。自分は、高校まで茅ヶ崎にいて、都内の大学卒業後、警備会社に就職。途中経理に異動となりましたが、人と話さない環境が自分の体質に合わず、鬱・休職をきっかけに会社を離れ、地域の活動に入ってきました。

現在、コワーキングスペースチガラボのスタッフをしているのですが、チガラボ以外にも複数の活動をしています。自分が鬱の経験があったことが影響しているのかもしれないですが、気持ちがちょっとマイナスにふれていたり、視野が狭くなってたりする人が、前を向くきっかけだったり、視野を広げるお手伝いができたらという想いで活動をしており、「とまり木」もそうした活動の中のひとつと言えます。

「とまり木」は、「C の辺り」と同じように一マス状の本棚が壁一面にあり、真ん中にテーブルがあり、奥には和室もあります。もともとここはまち中華のお店だったので、広いキッチンスペースがあります。自分のこれまでのつながりや DIY をしていて興味を持ってくださった人が内装 DIY を手伝ってくれて、皆さんと一緒につくりました。

最近は、コロナ禍の影響でリモートワークをする人が多く、気持ち的にお疲れの人も結構多いと思うのですが、「とまり木」に立ち寄り、会話をした後、店を出る時にちょっと元気になって帰宅する。そんな場所になってくれたらいいなと思って、この場所をつくりました。とはいえ、場所だけあっても会話は生まれないので、会話のきっかけとして本のあるシェア本屋がいい、と思ったのです。自分は、最初からシェア本屋をつくろうと思ったのではなく、地域の居場所をつくりたかったのです。

読み終わったお勧めの本を棚において、小さな本屋のオーナーになっていただく仕組みを考えました。
本棚には、オーナーの生き方や人生が凝縮されているように思ったからです。
現在のオーナーは約 50 名。小学生 5 年生から 68 歳の人まで幅広い年齢層の方々です。オーナーの居住地は。寒川・茅ケ崎市をはじめ、川崎、相模原、海老名、大和、大磯など、広範囲に及んでいます。

とまり木のオーナーは大きく３つに分かれます。一つ目は、本が好きで、本屋をやってみたい人。本を通じて自己表現をしてみたいという方。二つ目は、イベントを企画したり、お店番をしてみたいという方。三つ目は、移住とか定年退職を機に地域の人と関係をつくりたいという方です。どんなイベントをやってきたかと言うと、和室で煎茶の会、味噌づくり、月の旧暦の会、３Ｄプリンターの見学会など。オープンして半年間は本に関わるイベントは開催していませんでしたが、最近は読書会も開催しています。

「とまり木」では、お店番という仕組みを導入していて、オーナーの中には、店番をしながらハーブティーをいれてくれる人もいて、みんなで運営している感じです。

とまり木をはじめたきっかけは３つあります。会社を退職した後、自己分析の手伝いとキャリアカウンセリングをはじめましたが、そこに来る人にカウンセリングに申込むのはハードルが高いと言われたのです。カウンセリングを受けなくても、「とまり木」に来ておしゃべりして、店を出る時に気持ちが安らいでいれば、結果としてカウンセリングを受けるのと同じ効果が得られるのではないかと思ったのです。
最初の頃は、「カウンセリング未満の居場所」と言っていました。

自分は、チガラボというコワーキングスペースのスタッフもしていますが、チガラボに来る人は、自分のやりたいことがわかっている人が多いと感じます。やりたいことがでてくる前の段階で、気持ちの整理ができる人に向けての場が必要だと思い、「とまり木」をつくりました。

会社を休職する前くらいの頃に、帰り掛けによく駅前の書店に立ち寄っていました。当時は、本屋の中をふらふら歩いているだけだったのですが、今考えると自分のモヤモヤの解決の糸口を探していたのではないかと思います。とはいえ、本屋さんは、本が主役です。一方、シェア本屋は本棚オーナーが主役なのです。本棚を見ていると、オーナーの人生が見えてくる。なので、自分はお店にいらした方には一マス単位で本棚を見てみてくださいと伝えます。シェア本屋に来ると、オーナーの生き方と対話することになります。そうやって色々な棚を見ていると、この人は自分に似ている、などの発見があります。そうした時間を経る中で、最終的には自分との対話になるような気がします。

「とまり木」をはじめてもうすぐ 1 年になります。「とまり木」を始める時、二つの物件候補があり、どちらにすべきかを考えました。一つは、駅から遠くの元中華料理店。もう一つは、駅近のビル内の空き店舗。最終的に、駅から遠くの元中華料理店に決めました。僕は、小さい頃、自分の家に遊びに来た友達を自宅に置いたまま、外に遊びに行ってしまう、というような生活を送っていました。今も、お店番をお願いして、自分は買物に行ってしまうことがあります。自分には、今の物件が性分に合っていたのだと思います。

最初は、本棚オーナーは一箱本棚のオーナーという位置づけでしたが、運営する中でオーナーは「とまり木」全体の運営に関わってくださる方に変わっていきました。毎月１回、本棚オーナーのミーティングを開き、情報交流に加えて「とまり木」の今後のあり方についても話をするようになっています。最近、イベントを開くオーナーが増え、日程が重なることが多いのですが、こうした課題の解決についても、本棚オーナーミーティングの中で話し合っています。

今後の展望について話をします。居場所は、まちに沢山あった方がよいので、本に限らず、音楽、カフェ、ガーデン、銭湯など、色々なテーマの居場所があるとよいと思います。自分に合った場所が、まちに沢山あると、結果としてまち全体が元気になっていくのではないでしょうか。

人は、人生の中で、気持ちが上がったり下がったりしますが、「とまり木」は、気持ちが下がった時に来て

くれる場になるとよいと思っています。学校でいうと保健室や図書室、まちでいうとスナックやバー、そんな場所を目指しています。

【事例報告 3】♠芝　匠子さん(ぬくぬく文庫)

ぬくぬく文庫は、田園都市線のたまプラーザ駅から徒歩 5 分の住宅地にある家庭文庫です。もともと私は、名古屋市役所で都市計画の仕事をしていたのですが、結婚を機に横浜に引っ越し、建築設計事務所に籍を置きながら、横浜市の都市デザイン室で都市デザインの仕事をしていました。

夫の仕事の関係で、1 年間休職してアメリカで生活する中で、日常生活をエンジョイしているアメリカ人のライフスタイルに触れる機会があり、帰国後は、生活を楽しみながら社会貢献できる生活がしたいと思いました。子どもの誕生を機に仕事をやめ、家庭で「ぬくぬく文庫」の活動を始めました。

ぬくぬく文庫は、スタートして 17 年。初期の頃に文庫に通っていた幼稚園園児は、大学生になっています。もともと週 1 回開催していたのですが、新型コロナの流行後は、月 1 回文庫活動をしています。
部屋には、楽器など様々な小物が置いてあります。自由に触って、自分の知らない世界を想像してほしいなと思っています。会員になるには 100 円かかります。本の冊数制限なしに借りられます。
また、返却期限はありません。

午後 4 時半くらいになると、小学生が集まってきます。そこから、お話会が始まります。自宅で読みを練習してきた大人や子どもが、本を読みます。私は、紙やハンカチなどのモノを使いながらストーリーテリング(語り)をします。お話をしていない時は、子どもたちは、自由に遊んでいます。子どもたちは、よく、クローゼットやトイレを使って「かくれんぼ」をします。私は、ナルニア国物語に出てくる洋服ダンスが好きだったので、秘密基地みたいにして子どもたちが遊ぶのは大歓迎です。

子どもが中学生になり、ここに来なくなっても、おかあさんだけ通ってくる人もいます。
ここに来て、他のおかあさん達とおしゃべりをしながら時間を過ごします。
また、イベントを企画する時には、こういうおかあさんの中から、読み聞かせをしたい人を募ります。

日常活動以外に、毎年、夏と冬にお話会を開いています。学校の修了式が終わった時間帯に、近所のマンションの集会室をお借りして開催してきたのですが、最近は、外部に集会室を貸し出さないマンションが増えてきたので、今はここで開催しています。会の司会は、小学生にお願いすることにしています。

また、ハロウィーンの時には、子どもたちがカボチャをつかったランタンづくりをします。クリスマスにはクリスマス会をするのですが、歌を歌ったり、おじいちゃんの手品をみたりしながら楽しみます。
小道具をつくる人、寸劇の脚本を書く人も出てきて、それぞれに楽しんでいます。

外部の人に協力してもらい、英語やスペイン語でお話会をすることもあります。
言葉の意味がわからなくても、日本語以外の言葉を話す人がいるということを、子どもたちに実感して欲しいと思って、多言語のお話会を企画しています。大人向けに「山形弁で語る」というイベントを開いたこともあります。大人が楽しいと、その様子を見ている子どもたちも楽しくなるのです。

ぬくぬく文庫では、子どもたちの視野を広げて欲しいという想いから、本だけではなく、楽器や絵など、色々な事物に子どもたちが触れる機会を大切にしています。さらに言えば、物だけでなく、様々な人に触

れることで、世界には多様な人が生活しており、多様だからそこ、楽しいということを知って欲しいと思っています。

なので、ルールとお行儀の良し悪しは、国によって違うという話をします。日本では、お行儀よく、人の話を聞くのが常識ですが、海外では、子どもたちが床に寝そべって話を聞いていることを知り、リラックスしてお話を楽しむのもいいなと思ったのです。

最後になりますが、文庫活動の中で蒔いた種が、いつかどこかで芽を出してくれたらうれしいな、と思いつつ活動を続けています。

講演・事例報告の後、テーブル毎に意見交換や感想の共有をする参加者の活発な様子に、集まった方たちの居場所づくりに対する熱い想いが感じられる交流会となりました。